

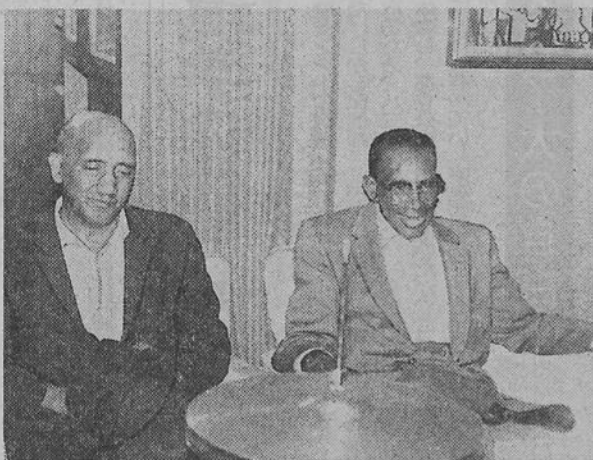
# ドクター内田の ジャズを聴く

②

「ジャズ」という音楽が、僕の中で、まるでのつぎきならない恋人みたいな魅惑的な響きを持つようになったのはいつごろからだったろうか。今考えるとおかしな話だが、聴き始めのころは、何か後ろめたくってちまっぴり暗いイメージに包まれていた。

何しろ僕らの世代は戦争中は軍歌ばかり、その上「アメリカ音楽すなわち敵性音楽」という教育がたたき込まれている。だから戦後、ラジオの「進駐軍放送」からジャズと呼ばれる音楽が流れて来た時には、「こんなに楽しい音楽に浮かれちゃってよいのかなあ」なんていうのが潜在的にあったのだ。

そういう言えはついで先日、中学生時代の同級会のこと。最近はこの集まりには共通の話題があつて素直にうれしくなつてしまつたが、定年を間近に控えたお役人の一人が、酒がまわつたにしてはい



昭和38年に内田さん方を訪れたジョージ・ルイス(右)とパンチ・ミラー

やにまじめに語りかけてきた。「今でもジャズを聴いてるの? あんなやかましくつて墮落した音楽のどこがいいんだい?」

おやおやこれはまた懐かしいフレーズを聞くもんだなあ。そんなお堅いことで若い人たちと対話ができるんかしら。何だが最初のころのまわりの空気を思い出しちゃったねえ。

ところで「進駐軍放送(FN)」から流れて来たたぐいは、今思うと「ダンス音楽」に過ぎなかつたんで、旧制の八高生だった、はたち前

後は、友人のせいもあつて、もっぱらクラシックと映画が興味の対象だった。まあ都会に初めて出て来た青年の気負いもあつたんだらうけれど。

「ジャズ」と呼べる音楽を本格的に聴いたのは、一九五〇年代の初め、名大医学部に

が、後年個人的にも親しくなつたジョージ・ルイスの、もの悲しいクラリネットの音色に毎度胸をつまらせた記憶がある。

河野さんの偉さは、単に自分の好みを押しつけず、そのころアメリカでも主流になりかけていた「モダンジャズ」を折にふれて取り上げたことにある。おかげでやがて僕には偶像的な存在になつて行く天才チャリィ・パーカーを初めてこの番組で聴けたのだ。

これには更に後日談がある。かけ出しのファンの僕が質問やらリクエストを送つたのがきっかけでレコードプロデューサーを本業とする河野さんとおつき合いが生まれ、ついにはジョージ・ルイスの最初の国内盤を出すお手伝いをする羽目となり、その上ルイスの日本公演では主治医をつとめたり、不思議な因縁で結ばれるのだ。

とほいえラジオにちぎとぎのころは、もちろんそんな未来が来るかは夢にも思はずはなかつた。

## 胸をはずませ ラジオを聴く

入つてからだ。桜山に下宿していた僕は週末だけ岡崎の家に帰つたが、そこで土曜日七時からのNHK第二放送にひたり夢中になつた。

「スイング・クラブ」という名のこの三十分番組は、ピックス・バイターベックの「アット・ザ・ジャズバンドボール」という名曲をテーマに「今晚は河野隆次です」の声に始まつたが、それを聴くたびに期待に胸をはずませたものだ。

曲目のほとんどは河野さん「専門の「クラシック・ジャズ」つまり「ニューオーリンズ・ジャズ」で占められた

(内田修)